



## アレルギーマーチの歴史

**加藤** アレルギーの患者さんでは、さまざまなアレルギー疾患がしばしば重なって起こります。古くは複数の疾患が同時に出ている「症候群」のようにとらえられていましたが、それらのアレルギー疾患は1つの流れの中にあり、時間の経過につれて同じ患者さんに次々と疾患が出たり治まったりすることを見出したのが、同愛記念病院の小児科医であった馬場実先生です。1970年代に提唱されたこの「アレルギーマーチ」は、その後世界的に認知されるようになり、「アトピックマーチ」とも呼ばれています。

最初にその概念が提唱されてからおよそ40年経った今日、アレルギーマーチの機序が、かなり明らかになってきました。本日はアレルギーのエキスパートである大矢幸弘先生をお招きし、アレルギーマーチについての詳しいお話をうかがいたいと思っています。まず始めに、アレルギーマーチの概要からお聞かせください。

**大矢** 食物アレルギーとアトピー性皮膚炎がほぼ同時期に起こり、その後喘息になって、やがてアレルギー性鼻炎を発症する子どもが多いことは、多くの小児科医が実感していました。乳幼児期に発症した食物アレルギーとアトピー性皮膚炎は、そのまま治ってしまうことも少なくありません。しかしそれらが治ってきたところに喘息が急激に増えてアレルギー疾患の主役となり、学童期にはこれも落ち着いてきて、今度はアレルギー性鼻炎が増えてきます。そのた

め成人のアレルギー疾患では、アレルギー性鼻炎が多いのです。

全体の流れの中で年齢ごとに有病率の高いアレルギー疾患へと主役が変わっていくのか、あるいは同じ人が次々にアレルギー疾患に罹患していくのかは、コホート研究を行わなければわかりません。しかしアレルギー疾患の全貌をカバーするようなコホート研究は、実はあまり行われてきませんでした。ただ、アトピー性皮膚炎の患者さんが、その後喘息やアレルギー性鼻炎に罹患しやすいことは、統計的に示されています。

また、乳幼児期にほぼ同時に出てくる食物アレルギーとアトピー性皮膚炎については、どちらが先なのか、因果関係がわかっていませんでした。しかし最近になって、アトピー性皮膚炎のほうが先であることがわかり、最初の根幹となる部分が明らかになったことで、アレルギーマーチの全貌がようやく見えてきたのです。

## 乳児の食物アレルギーの感作経路と食物制限

**加藤** 馬場先生は、新生児の時期から抗原をもっているのではないかと、消化管からなのか、胎盤からなのかと、その経路を精力的に探っておられました。われわれが医師になったころも、アトピー性皮膚炎の子ども之母親に食事指導をしていましたね。

**大矢** そうでした。まだ離乳食を始めていなければ母親の食物制限を勧めたり、予防のためとして妊娠中に卵や牛乳をとらないほうが良いといった指導が行われていました。

**加藤** 食物制限はガイドラインにも載っていましたが、いつごろから推奨されなくなったのでしょうか。

**大矢** 日本のガイドラインは、比較的早くから推奨をやめています。米国小児科学会は2000年に、母親は妊娠中にピーナッツを除去し、授乳中もナッツ類は避け、子供も1~3歳くらいまでは卵、牛乳、魚などをとらないように勧めるガイドラインを出しています。この食物制限は2008年のガイドラインまで推奨されていましたが、ガイドラインの普及につれて、アレルギーはどんどん増えていきました。

アレルギーの質の高い観察研究が出てきたのは、21世紀に入ってからです。2008年の『Pediatrics』では、離乳食の開始時期が遅い子どものほうが、アトピー性皮膚炎や喘息が多いと報告されています。また英国とイスラエルのピーナッツアレルギーの子どもの比較した報告によれば、イスラエルのピーナッツアレルギーの子どもは英国の1/10でした。食べ始める時期も、イスラエルでは生後5~6カ月から食べ始めて、1歳時には8割以上がピーナッツを食べています。一方、英国では1歳になっても2割しか